

『演題: Epstein Bar ウィルスが引き起こす白血病・リンパ腫を治したい』

講師名: 幸谷 愛(こうたに あい)

学 歴 : 1996 年 京都大学医学部医学科卒業

2003 年 医学博士(京都大学医学研究科血液腫瘍内科学)

職 歴 : 1996 年 京都大学医学部附属病院内科

1997 年 静岡市立静岡病院血液免疫内科

2003 年 学術振興会特別研究員(京都大学 本庶佑教授)

2006 年 学術振興会特別研究員 (Whitehead Institute Dr. Harvey Lodish)

2007 年 学術振興会出産育児復帰支援特別研究員(Whitehead
Institute Dr. Harvey Lodish)

2008 年 東京大学医科学研究所先端医療研究センター・血液腫瘍内科 助教

2011 年 東海大学テニュアトラック特任准教授(PI)

2016 年 東海大学医学部血液腫瘍内科学教授

2024 年より現職。

講演の概要 :

白血病と聞くと”不治の病”と感じる人、今の高校生、どのくらいおられるでしょうか。

私が高校生だった頃は、有名女優や有名力士が白血病で亡くなり、「世界の中心で愛をさけぶ」という白血病の若い女性患者の話が映画になり、不治の病と思われていました。

しかし、それから 30 年あまりの間に、白血病は治るようになりました。特に若い人の白血病については、大変治療成績が向上しました。

ただ、それでも治らない白血病もあります。

Epstein Bar ウィルスが引き起こす白血病、リンパ腫もその一つです。不幸なことに現在その発症数が増加傾向にあります。一因には衛生状態の向上によって、若い人たちが子供の頃にこのウィルスに感染しなくなってしまったことが挙げられます。

治りにくい一つの原因としては、欧米で頻度が少なくアジアに多いため、欧米での研究開発は全く進んでいない現状があります。そこで、この現状をなんとかしたく、Epstein Bar ウィルスが引き起こす白血病、リンパ腫を研究しています。

サイエンスには国境はありませんが、欧米が無関心なものを東アジアの国々で進めていくことも大変重要と思います。胃がんの多い日本だからこそ、胃カメラが開発された事例もあり、Epstein Bar ウィルスが引き起こす白血病、リンパ腫については、アジアのリーダーとして日本から世界に発信していく必要があると考えています。もちろん、サイエンスは大変興味深く、仕事としてとても楽しいものですが、そこに、少し、ミッションのようなものを持ちつつ進めていけると、仕事へのモチベーションは高まります。研究過程で、ある患者さんとの約束がありました。最近少しだけ、その約束を果たせたと思う出来事がありました。研究者冥に尽きる経験でした。

研究に興味のある高校生の皆さんに、研究においても「病気を研究する」ことの重要性、優位性、楽しさ、そして、上記のようになんとも言えない達成感と幸福感(勝手な私見ですが)をお伝えできれば幸甚です。

『演題: 言葉を理解するロボットと人工知能』

講師名:

宮澤 和貴(みやざわ かずき)

学 歴 :

2013年3月 東京都立科学技術高等学校 卒業

2017年3月 電気通信大学 情報理工学部 知能機械工学科 卒業

2019年3月 電気通信大学 情報理工学研究科 機械知能システム学専攻 修了

2022年10月 大阪大学 基礎工学研究科 システム創成専攻 博士号取得(工学)

職 歴 :

2019年4月 - 2022年3月 日本学術振興会 特別研究員(DC1)

2022年11月- 現在 大阪大学 大学院基礎工学研究科 助教

講演の概要:

ロボットや人工知能は私たちと同じように言葉を理解することができるでしょうか？言葉の意味は辞書に書かれていますが、単に辞書をダウンロードして引用できるだけでは、言葉を理解しているとは言えないでしょう。私は、ロボットが「見る」・「聞く」・「触る」といった現実世界での経験を通じて、私たちと同様に言葉の理解を深めることが重要だと考えています。一方で、ChatGPTのように文章から学習し、言葉を扱うことができる人工知能も登場し広く普及しています。この講演では、身体を持つロボットと身体を持たない人工知能が言葉を学ぶしくみについて紹介し、それぞれの類似点や違いについてお話します。

